

「国語」（3年）の『山月記』（中島敦）は、私が高校生の時にも教科書に載っていた。

まして、俺の頭は日ごとに虎に近づいてゆく。
 どうすればいいのだ。おれの空費された過去は？
 おれはたまらなくなる。
 そういうとき、おれは、向こうの山の頂の巖に登り、
 空谷に向かってほえる。
 この胸を焼く悲しみを誰かに訴えたいのだ。

（中島敦氏）



一行が丘の上に着いたとき、彼らは、言われたとおりに振り返って、
 先ほどの林間の草地を眺めた。
 たちまち、一匹の虎が草の茂みから道の上に躍り出たのを彼らは見た。
 虎は、既に白く光を失った月を仰いで、二声三声咆哮したかと思うと、
 また、もとの叢に躍り入って、再びその姿を見なかった。

先生の朗読を聴いていると、李徴が哀惨に自作の詩を披露し、虎になってしまったことを語り、月光に照らされる中、虎の姿を友にさらし、草むらに消えていく情景が目には浮かぶようだった。今でも当時の先生の朗読が聞こえてくるようだ。

古文の『徒然草』（吉田兼好）は、今読んでも頷けるところがある。「国破れて山河在り」で始まる『春望』（杜甫）については、人の世が変化して移ろいゆくさまと、変わらない自然についてうたっている。それらに触れると、「書かれた時代や国は違うけれど、人間の考えることは変わらないのだな」とつくづく思う。

また、「宜野湾高校の生徒達へ(7)」で取り上げたニーチェは、「倫理」（1年）で学ぶ。「倫理」では歴代の魅力的な思想家たちが、「世界」や「人間」等について一生をかけて追究した**智慧の宝庫**だ。

さて、「英語」（1年）の教科書では、**長友佑都**選手の生い立ちを読み、世界で活躍する選手になるまでの道のりについて、2年では卓球の**伊藤美誠**、**平野美宇**選手が成功するために取り組んだこと、3年では

モーツァルトや**ビルゲイツ**の例を通して**1万時間の法則**とはどのようなものを学ぶ。



「英語」の文法等が**苦手**な生徒も多いかもしれないが、長友選手をはじめとする魅力的な人たちの生き方について、何とか英文に取り組むことによって英語力の向上はもちろん、皆さんの生き方に大きな**ヒント**を得ることができるはずだ。

「英語」は、皆さんが変化の激しい社会を生き抜いていく上で**必須のツール**だ。ALTのベン先生を活用しながら楽しく英語に取り組もう！